

令和 8 年度第 1 回地域福祉計画推進会議 会議録

1. 開催概要

日 時 令和 8 年 7 月 28 日（火）14：00～16：00

場 所 川崎区役所 10 階会議室

出席委員（敬称略）

飯嶋委員（川崎市南部基幹相談支援センター 職員）、児玉委員（大師地区老人クラブ連合会 会長）
七條委員（あいせん保育園 園長）、寺崎委員（川崎市介護支援専門員連絡会 川崎区支部長）
中島委員（しおん地域包括支援センター センター長）、牧岡委員（共育ひろば主宰・社会学博士）
服部委員（川崎市川崎区社会福祉協議会 事務局長）、宮越委員（川崎区地域教育会議 議長）、
本橋委員（川崎区連合町内会 理事）、三ツ森委員（川崎区民生委員児童委員協議会 副会長）

事務局

山崎区長（川崎区役所）、町田所長、若尾副所長（地域みまもり支援センター）

早川課長、平井係長、柴田（地域ケア推進課）

オブザーバー

曽我課長（地域支援課）、笹島課長（高齢・障害課）、紙屋担当課長（保育所等・地域連携担当）、
成沢課長（企画課）

2. 議題

- （１）第 7 期令和 7 年度川崎区地域福祉計画の評価について
- （２）令和 8 年度の地域づくりについて
- （３）第 8 期川崎区地域福祉計画についての考え方
- （４）情報交換等
- （５）その他

3. 配布資料

会議次第

川崎区地域福祉計画推進会議委員名簿

川崎区地域福祉計画推進会議開催運営等要綱

資料 1 第 7 期川崎区地域福祉計画 令和 7 年度評価（案）

資料 2 令和 8 年度の地域づくりについて（経過）

資料 3 第 8 期川崎区地域福祉計画についての考え方

参考資料 1 区計画評価の考え方

参考資料 2 第 8 期川崎区地域福祉計画（たたき台）

参考資料 3 第 8 期川崎区地域福祉計画策定に係る地域課題について

参考資料 4 第 8 期川崎区地域福祉計画評価（イメージ）

4.意見要旨

(1) 第7期川崎市地域福祉計画 令和7年度評価（案）

資料1に沿って評価の内容について事務局から説明。内容や評価に対して意見を求めた

（牧岡委員）1つ目の重点方針の地ケア出前講座を地域で実際に呼んでいるところはあるか。

（三ツ森委員）小田地区の町内会には来てもらって、落語をやってもらった。みんなまた来てほしいというくらい好評だった。浅田に住んでいる人からも良かったという話は聞いている。小田地区社会福祉協議会としても、認知症の講話をお願いした。みんな保健師の方に質問をする等、盛り上がった。

（早川課長）地域包括ケアについて楽しみながら学んでいただけることは良いことだと思っている。地域活動の場で福祉に関するチラシやリーフレットを配ったり、包括支援センターや保健師の話をさせていただける機会にもなっている。

（服部委員）区社協としても、ボランティア入門講座をしてもらって140人も人が集まったことはとても実のある事だと思っている。子育てフェスタもそうだが、市役所の場所が良いのではないと感じた。

（早川課長）本庁舎は新しく開放的な空間で、出入りが自由な空気があるので、初めて来る人も参加しやすい場所になっている。民生委員の研修会にも使っていただいた際も好評だった。地域の人に使ってほしいという市としての意向もあるので、もっと開けた場所になるといいと思っている。

（牧岡委員）縁側については、最近どういった様子か。

（平井係長）広報の甲斐があつてか、昨年度も2つの団体から活動に関する問い合わせもいただき、現在は16個の団体にまちの縁側として登録してもらっている。みなさんそれぞれが主体的に活動を行っていただいているので、活動の見学に伺い、後方支援を行うくらいになっている。

（牧岡委員）自分で行っている活動も縁側に参加するか検討したことがあったが、参加すると撤退しづらくなるということもあって、参加を見送ったことがある。身近な場所にこういう地域活動があるということだけでも、地域の人は喜んでくれるなど感じている。小規模の活動があると、入院していると自然と連絡が来るなど、ゆるやかなつながりになっている。8期計画に向けての手がかりがあるのではないと思う。

（中島委員）事業56の認知症シンポジウムについては、人がたくさん来ていたなという印象がある。認知症への興味関心は増えているのかなと思う。一方で、健康の早期発見のための健康チェックが広く一般化されてきたが、認知症の早期発見についてはそういった仕組みはないため、課題と感じている。

（牧岡委員）最近は自分自身だけではなく、ケアする側の意識の変化にも期待している。認知症の話をすると、話をされた人の大体が「自分大丈夫かな？」という意識になるので、これが「周りのあの人は大丈夫かな？」とか、周りの人への対応をどうすればいいか等の話が出てくると良いなと思っている。ただ、関係性が近い人に対して、その人が認知症かどうかといった話はなかなか難しいので、専門職等の人が関わるような仕組みがあると良い。物忘れ外来は増えているが、アウトリーチ的な活動はなかなかない。MCI等も受けている人はいるが、受けてもそのままになってしまっている人も多い印象。理解者が増えているこの流れで、アウトリーチ的な活動があると良い。

(平井係長) 子ども向けの広報冊子を作成したが、小学4年生向けに配布しただけにとどまってしまっているので、他の場所でも活用できないかと考えている。寺子屋等で活用することなどは考えられるか。

(宮越委員) 寺子屋では同じことをすることに飽きている子も多いので、新鮮に受け止めてくれるのではないと思う。水曜日の午後に来てもらえれば、時間はある。

(牧岡委員) 人数は多くはないが、アウトリーチとしてはとても良いと思う。

(2) 令和7年度 地域づくりの方向性について

資料2に沿って、重点地区の取組について事務局から説明。委員が感じる地域の現状や課題、地域づくりの方向性への意見を求めた。

(中島委員) 田島地区の活動については、食を通じた活動はとても良いことだと感じている。しおん包括の地域では、サポーターの方がとても活動的に動いてくれていて地域活動をしてきている。その活動の後参加者の方々を食事に誘って食事会に行っていて、しまいには旅行に行っているようだった。最初は月に2回だったのが、活動から食事会が好評で週に〇回開催するようになったと聞いている。自宅を開放して活動を行うか迷っているとも話を聞いた。この活動に参加してくれている人の中で心配な人の情報を包括にも伝えてくれていてとても助かっている。

(牧岡委員) カレーサロンの活動については、地域が祭り等で忙しい時期とかぶっているので、担い手としては一杯一杯であると話を聞いている。他から人を引っ張ってこないといけないのではないかと感じている。田島地区社協の方々や若い方々が多いので、5年ほどは問題ないとは思っているが、未来を見据えると他の人達にも入ってもらう必要があると感じている。参加者がボランティアになっていくと良いなとは思っているが、どうアプローチをしていくか検討すべきと感じている。参加者からは継続してほしいという期待感もあるので、活動としては安定して地域から求められているものになっている。

(牧岡委員) 大島地区については、ここに書いてあるような課題は地域の声としてもあるなど感じている。自主的に子どもと関わる活動をする人は現れているが、町内単位でやる母親クラブは減ってきているなど感じている。母親クラブは区全体でも減ってきているのか。

(服部委員) だいぶ減ってきてしまっている。

(三ツ森委員) 小田地区では2町会だけしかない。

(牧岡委員) 減ってきている現状を踏まえて、大島ではなんとかしないといけないという声はある。唯一残っている大島1丁目の人たちは合同でやらないかと他の町内会を誘ったりして継続できるように熱心に働きかけてくれている。動いてくれている人はいるので、支える側がそういった地域の声を受け止めてくれるといいなと感じている。大島地区社会福祉協議会の中にも母親クラブの経験者がいて、減ってきている今の現状に危機感を持っている人もいるので、今のうちにこういう考えの人の声を拾えていけると良い。3年経つと経験者も消えてしまうかもしれないので、危機感を持っている。

(早川課長) 福祉的な課題を抱えるケースもみられるので、行政としても地域の方の声を聴いている状況。

(七條委員) 子育て支援センターが出来たときは多くの人が来所していたが、どんどん少なくなっていると聞いた。センターに行く人の多くは、色々な問題を抱えている人が多いのかなという印象。そういう人が職員に相談して一時保育やショートステイに繋がっているような印象があ

る。一方で保育園としては地域の子育て支援を行ってはいるが地域のお母さんが気軽に参加できるような場所にはなっていない。お母さんの中では選んで行っているような人もいれば、何も情報がなくて行けていないような人もいる。どういうふうに拾い上げて色んなところがあるということを知ってもらえるかが課題だと感じている。子育てに悩んでいなくても気軽に遊べる場として来てほしいとは思うがなかなか伝える方法が難しい。

（牧岡委員）幼稚園の時の知り合い同士が誘い合ってPTAの役員をやっていることが多いという話をきいた。保育園よりも幼稚園の知り合いが多いようで、保育園は親が仕事をしていて忙しいという前提があるからか、あまりそういう関係にはなりにくいのかなと思っている。

（七條委員）保育園の見学に来る方も、PTA活動や保護者会はあるのかという質問が良くきたりするが、ないと答えるとほっとした表情を見せる方も増えた印象がある。もちろん横のつながりが欲しい人もいるが、避けたいと思う人も一定数いる。保育園としては、小学校に行った後も横の繋がりををもってほしいと思っているので、サポートはしているが、いらないと思う人もいる。牧岡委員の話を聞いて、幼稚園だとそういう関係づくりが比較的できるのかなと感じた。

（牧岡委員）あまり表では見えてこないが、スマホでつながっている人が多くいる。教育会議の中では親同士の関係としてはどうか。

（宮越委員）保育園か幼稚園かの違いは分からないが、親同士のつながりはちゃんとあると感じる

（牧岡委員）あいせんホームに勤めていた時に、めだかの学校という幼児グループをしていて、その人達のほとんどがその後学校の役員をやってくれていた。そのおかげで情報が得られた。こどもが保育園や幼稚園の時期に地域とどういう関わり方をするのかや、地域との繋がりをどう作るかが大事になると思っている。そういうことを含めた働きかけを地域子育て支援センターに行きたくて欲しいと思っている。ヒアリングで伺った地域子育て支援センターあさだの職員は、実際にご自身も地域とのつながりがあり、地域活動を行っている方だったので、親御さんとの関わり方もそうした目線で行っているというのが良くわかったし、他の職員もそういう目線で接して欲しいと感じた。地域子育て支援センターのスタッフへの研修をしてほしいなと思った。

（紙屋課長）＜確認中＞

（牧岡委員）センターが出来てまだ日は浅いと思っているので、これからだとは思っている。鶴見の子育てグループにも関わっているが、十何年ぶりに覗きにいくと、利用していた人がスタッフになっていたり、そこに来ていたお母さんが色んなところで子育て関連の講演を行う力をつけていたりする。そういう人が出るような視点を機関の人が持ってくれると良いと思っている。

（牧岡委員）大師地区の重点取組についてはどうか。

（児玉委員）認知症に関する興味関心は増えているなど感じている。熱中症になって認知症につながってしまうという話も聞くので、これからの季節は特に注意が必要だと感じている。

（牧岡委員）この取組は最近始まったものなので、これからが重要だと感じる。企画段階で関心が高くキーパーソンになるような人を見つけていけると良いと思うがどうか。

（平井係長）地域包括支援センターにも話を持って行ったところ、好意的に受け取っていただけたので、共催のような形で実施できればと思っている。また、地区社会福祉協議会の方々にも説明に伺って、認知症に対するご意見をいただいて、一緒にやっていきたいという話はしているところなので地域一丸となって進めていく予定。本当は商業施設や地域の商店も巻き込みながら進めていければいいなとは思っているところ。

（牧岡委員）課題はありつつも、手がかりはあるということなので、検討しながら進めていって欲しい。

（服部委員）認知症に関する情報で、大師第2地区社会福祉協議会の生き生き茶防という活動の中で、認知症に関する映画を上映することになった。区役所にも支援していただいている。

（平井係長）地域で上映会を行いたいが著作権の問題もあるため難しいというお声をいただいたので、地域活動の支援の一環として、今年度、試行実施を行っている。包括のセンター長会議にて実施してくださる場所を募集して、お声掛けいただいた。

（中島委員）しおん包括でもアウトリーチの活動として、その仕組みを使って2か所でオレンジランプという映画の上映会を行う予定である。とても良い映画なので皆さんに見ていただきたい。

（3）第8期川崎区地域福祉計画についての考え方

資料3に沿って事務局から説明。基本方針毎に基本方針案と重点ポイント案についての意見を求めた。

基本方針1

（宮越委員）担い手づくりがキーになってくると感じた。福祉と聞くと一方的に世話をしてもらうことと思われがちだが、誰でも世話をする側になれる。年代によって果たす役割は違うし、高齢者であっても主体性を持ってやりたいと思う気持ちを育てていかないといけないと思う。寺子屋での小学生向けの地域福祉の広報をしたいと言っていたが、小学生に話をしても、小学生なりに自分たちの福祉への関わり方を考えられると思うし、福祉へのやりがいを感じられると思っている。地域教育会議でもサマーチャレンジとして子供たちに20か所以上の場所を紹介して体験学習ができるようにしている。その中に食糧支援や子育てサロン、デイサービス等の福祉に関わる仕事も紹介している。福祉関係の仕事はどうしても応募件数は少ないが、子どもたちも体験することでやりがいを感じて地域に貢献することの楽しさや自信を感じてくれていると思っている。地域防災の観点では中学生がコアの人材として期待されているが、福祉の面でも担い手としてもっと期待してもいいのではないかとと思っている。学校ではなく地域が中学生を担い手になる可能性がある意識して輪を広めてくれるといいなと思っている。

（牧岡委員）実際に地域で中学生が活躍している場を体験出来るような機会があると良い。

（宮越委員）サマースクールは、コロナ前には学校と一緒に実施していたが、コロナ後は学校が手を引いてしまった。ここ2年程は集客に苦労していたが、今年は35人程度の応募があった。中学生にはもっと福祉に興味を持って体験して欲しいと思っているので、いろいろな機会に誘ってほしいと思っている。

（牧岡委員）普段外から見ている景色を内側に入ってみることで、違った感じ方をしてくれているなと思っている。保育園の体験に参加した子たちの感想を読むと、とても素敵なことを書いてくれていて、とても手ごたえを感じる。

（七條委員）あいせん保育園は、サマースクールの受け入れ先となっていて、参加してくれる中学生はとても頑張ってくれる。卒園生が来てくれたり、帰る時間になると園児たちが泣いてしまうくらい仲良くなってくれて、とても良い機会になっていると感じる。

（早川課長）宮越さんの話は、我々が大事にしたいと思っている重点ポイントの要点をくまなく踏襲されていると感じた。宮越さんのように、地域で活躍されている皆さまが大事にしてい

ることや工夫している視点から、今回お示した行政の方向性（重点ポイント）を確認していただければ有難い。

（牧岡委員）重点ポイント4つ目の「対話や交流を通じて理解を深める」というのがあるが、それを展開するときには、誰が誰と、どういう広さでどういう話をするのか、ということを考えてほしい。どこか遠くの話をしてその人が地域で暮らしていく力にはなりにくい。肌で感じられるようなテーマでありつつ差し支えないものを考え、選択するのがとても大変だと思う。身近すぎても喧嘩につながるので程よい関係づくりが必要だと感じる。

あいせんホームで働いていたときに、いじめをテーマにして話をしたら加害者は誰だという追及の話になった。また別の話で、地区社会福祉協議会の会議で知り合いの青年にいじめの体験談を話してもらおうと提案した際に、会議の委員から「いじめられる側にも問題がある」という言葉が出たため、提案を取り下げたが、それはその青年が1人だったからで、これが当事者が何人かいたら、そのまま実施していたと思う。当事者も受け止め側も組織化されていれば話し合いが成り立つと考えている。それは点対面ではなく、対面になるからである。当事者側も組織化して面にすることで扱いづらいテーマでも話し合いが円滑になる道筋になると考えている。

基本方針2

（牧岡委員）「①地域で続く活動を育てる」というところがあるが、この伴走の関係は、ある時はAが主催、BとCが協力する。ある時は主催がBでAとCが協力するというような形で、上手くサイクルが組まれて地域活動が進んでいくのが良い形ではないかと感じる。一方で地域では、そういうことを考えるのが大変で、なんとなく集まってなんとなく実施してしまっているような状態のところが多い。そこを整理することで、④のどこどうマネジメントしていくかの検討にもつながっていくのではないかと。整理をしないで例年通りやれば良いと継続してしまうと、活動が年々増えていき、一杯一杯になってしまう。

（早川課長）地域の活動を調べてみると、一つの取組を複数の団体が協力して行っているケースで、どちらも主催ではないという捉えをしていることもある。仮に双方に取組の必要性に疑問があるのであれば、取捨選択する機会があってもよいと思っている。

（牧岡委員）地域の中にいると活動をやめるということはいいいにくい。

（早川課長）地域活動に対しては行政側からも意見は言いにくい。行政の取組であれば必ず必要性を念頭に実施したいと思っている。

（中島委員）担い手を育てていくときにあまり負担感が多いと、町内会の中でも出来ないという話になってしまうので、なるべく役割を分散し、負担感を減らすことで活動が継続できているという話もよく聞く。

（牧岡委員）もちろんそうなのだが、どう分散するのかというゆるやかな調整が難しい。

（中島委員）宮越委員の活動はとても良いなと思った。うちの町会では中学生や高校生に防犯パトロールに参加してもらえると町内会のことも知ってもらえるし、担い手にもつながるのではないかと話を聞きながら思った。

（牧岡委員）年末パトロール等で、つながりのある大人が子どもを連れてきたりもしている。夜に大人公認で遊べるので子どもも楽しんで参加してくれている印象がある。偶然ではなく、連続的につなげられると、地域と子どものつながりになっていくのではないかとと思う。

（服部委員）計画全体に関わることだが、令和9年4月に改正される社会福祉法では、防災と消費者行政の項目が入る予定なので、その辺りを反映しても良いのではないかな。また、AIを活用することで人と人が接する時間が増える、というようなことも入れた方が良いのではないかな。

（早川課長）社会福祉法への対応については、まずは市計画でどう扱うかという話になるかなと思う。区ごとにそれらを記載していくかどうかは市計画の担当とも確認しながら進めていきたいと思う。

基本方針3

（牧岡委員）障がいとの関係でこういう計画の中で関わっていけばいいかと考えたがどうか

（飯嶋委員）説明を聞いていて、障がいについてどう関わっていけるか考えていたが、1つ1つ関われるところがあるのではないかなと感じている。例えば、基本方針1の意識づくり「相手に合わせて伝え方を工夫する」というところで、目で見てわかるように工夫することや体験を重視することは外国の方だけではなく障がい者への配慮についても同じことが言える。基本方針2

「関わりやすい入口をつくる」についても、前回の会議でお話した、障がいのグループホームの話にもつながると感じた。障がい者のグループホームは寮のような形になっていて、日中はみんな違う通所や作業所に行き、夜に戻ってくるような生活を送っているところが多いが、最近はグループホームが地域の人を呼んで会議を開くことが法律で定められたこともあり、開かれた場になってきている。法人としても大島にグループホームを持っているので、そこでは町内会の人をお呼びして、見学をしてもらったり住んでいる人との交流の機会を持ったと聞いている。そこに住んでいるということを秘匿している時代もあったが、地域に開かれた場になってきている。

コロナ前は、販売会を福祉まつり等に出展している作業所が多かったが、コロナを機に減ってしまい、交流の機会が減ってきている。川崎区内にも作業所はたくさんあるので、作業所単位での地域との交流がもっと増えてもいいのではないかなと考えている。先ほど牧岡委員からもあったように、個と個のつながりは難しくても面と面になることでうまく交流できるのではないかな。認知症についての興味関心は増えているという話はあがっているが、障がいについてはまだまだ身近に感じてもらえていないのかなと感じている。家族に障がいのある人がいないと、なかなか身近に感じにくいものではあると思っている。また重度障がいの子どもたちは、小さいころから支援学校に通っているので、健常者の子どもたちとの関わりがほとんどない状態にあるし、インクルーシブ教育はまだまだ進んでいない印象。まず身近に感じてもらわないと、地域の中で暮らしていくことは難しいのではないかなと思っているので、施設単位で町内会の方々と交流しながら、どこにどういう施設があるのかを知ってもらえると良いのかなと思っている。ここで基本方針3の仕組みづくりにもつながってくる。支援者同士のネットワークづくりも勿論そうだが、そこで暮らしている人たちへの入り口のようなものが作れると良いと思っている。障害者相談支援センターの地域づくりとしては、区に5つしかないので、10地区を対象にするのは難しいが、既存の取組に乗っかるような形で関わりを増やしていけると良いのかなと感じている。

（牧岡委員）うちの町内会にもグループホームがあり、町内会に参加してもらっている。お祭りにも出店してもらったり、輪おどりに参加してもらったりしていて、すごくいい景色だなと思っていたが、話を聞いていて、これを発信していかないと駄目だなと感じた。こういうことが出来るということを他の地域に発信していくことが重要だと思う。こういう発信の部分で行政に協働で動いてもらえると助かる。

（飯嶋委員）それが少しでも、いつもある景色になると良いかなと思っている。

（牧岡委員）ケアマネジャーとしては個別支援が主軸だと思うが、このような地域との関わりの観点から見るとどうか。

（寺崎委員）面での支援はケアマネジャーの業務としては入っていないが、必要な取組だと思っている。以前は近所の民生委員をはじめ地域の方にご協力いただき、見守りをお願いしたり、包括支援センターの会議で民生委員との関わりの機会を作ってもらうなどして、地域の方とつながっていた。田島の子ども食堂にはケアマネジャーも参加しているという話も聞いているので、やはり新たなものではなく、既存の取組等に相乗りできると良いのかなと感じた。今あるものをどこでキャッチして活用していけるか、といった点でアシストしてもらえると良い。

（飯嶋委員）ケアマネジャーの仕事だと、どうしても個別支援上のニーズが入りになるのもその点も難しいところもあるのかなと感じる。

（中島委員）教育文化会館で活動しているキョウブンカフェについては、包括は意見交換会に呼ばれたりしているので、よく知っているが、ケアマネジャーに話すと全く知らなかったりするので、ケアマネジャーへの地域活動等の情報提供をどうするのが良いのかと思っている。

（牧岡委員）そういう壁を越えていくためにはどんな情報提供の方法や会議があればいいのか悩ましいところ。

（早川課長）障害のある人に関する広報についてはどこも慎重になりすぎているのか、なかなか上手く出来ていないと感じている。地域と地域相談支援センターとの関係づくりについても、現在は年度当初の合同民協で挨拶に来てくれているが、もっと効果的な関わり方があるのではないかとも思っている。

（飯嶋委員）民協への挨拶は、毎年、地域包括支援センターと一緒にやっている。高齢障害課の係長の声掛けがあって始めたことなので、川崎区でしかやっていないことではある。他にも、社会福祉協議会等から勉強会を開いてほしいとお話をいただく等、細々と関係性も出来てきてはいると感じているが、なにせ知名度が低いので、草の根活動的にしていきたいと思っている。

（早川課長）民生委員との顔合わせが大切なのは、民生委員が往々にして地域のキーパーソンであることが大きい。今後、地域の理解をより得ていくためには、民生委員だけでなく、町内会などにも周知していくのが良いと思う。その際は挨拶やインフォメーションだけではなく、事例等の情報提供もあると地域の人たちの受け止め方も変わってくるのではないかと思う。実際、地元の作業所と連携している町内会もある。

（飯嶋委員）毎年、区社会福祉協議会が開催している「福祉でつながる地元交流会」等のおかげで、民生委員との関係性は出来てきており、相談も頂けるようにはなってきているが、まだまだと思っている。単発で沢山のことを行うというよりは、一緒にやれることは一緒にやったり、少ないマンパワーの中で効率的に出来るようなことを一緒に考えていければ良いと思っている。

（牧岡委員）小さいものでも1つモデルが出来ると良い。

（飯嶋委員）川崎区は多様性の中での困りごとが非常に多い地域であると思っている、多問題を抱える人が多いこともあり、支援者同士のネットワークが重要視されているからこそ、組みやすさを感じることもある。そこに支援センターももっと関わっていけると良いと思っている。

(4) 情報交換

(三ツ森委員) 川崎区の民児協で区の小中学校の教諭との交流会を9月10日に実施する。民生委員は各地区から8名、学校からは生徒指導の先生が参加し、中学校区に分かれて情報交換を行う予定。

(宮越委員) 富士見公園で「冒険土のひろば」という遊び場を運営しており、ワイルドな遊具や穴掘りが出来る場所として開いている。品川や横浜等の遠くから足を運んでくれる人もいて、夢パークまで行かなくても遊べる場所があるのはありがたいと言ってくれる人もいる。富士見公園が新しくなったから見に来たというような人が、引き寄せられるように遊びに来てくれたりもしている。AIの時代になった今こそ、子どもたちには五感を使ってわんぱくに遊んでほしいと思っているが、大人気のターザンロープが危険だから撤去してほしいと行政から言われている。リスクや責任ばかりを気にするのではなく、どうやったリスクを越えていけるか、リスクを安全に管理できるかということと一緒に考えてほしい。闇雲に危険なことを子どもたちにさせるつもりはないので、どうやったらデジタルではない貴重な体験を子どもたちに提供できるか、お知恵をいただきながら考えていきたい。

(成沢課長) リスクがあるから撤去してほしいということではない。こちらとしてもリスクをすべて排除しようとしているわけではなく、リスクとハザードは分けて考えている。現在の状況ではターザンロープ自体にハザードがあると認識しているので、行政としては許容できない範囲にあるとお伝えしている。また、行政としてはどうしても責任問題は避けられないということをご留意いただきたい。

(宮越委員) 一緒になって越えていくための協働の場を設けてもらいたい。

以上